

## ミャンマー・ビルマの歴史から「国家、国民の形成」を紐解く

長田 紀之

2018年5月

「そこでは誰がその国家に属する人で、誰がそうではないか、この区切りを経験的に刷り込ませていく過程があった」

ミャンマー・ビルマ政治史、都市社会史を研究する長田紀之（おさだ のりゆき）氏に著書『胎動する国境—英領ビルマの移民問題と都市統治』（山川出版社、2016年11月）を中心に、これまでの研究の経緯、本書の内容と意義、現在のミャンマーへの含意、そして研究者を目指したい人へのメッセージを語っていただいた。本書は第7回「地域研究コンソーシアム賞（登竜賞）」を2017年に受賞。本書の基になる博士論文は第14回「アジア太平洋研究賞（井植記念賞）」を2015年に受賞。

## ミャンマー研究のきっかけ

そうですね、これまでの経緯と今の研究は結構一致しています。本を出したことで、一段落して、落ち着いている状況です。こうして本を出すまでに15年ぐらいかけました。学部の卒業論文がもとになっていて、卒論、修士論文、博士論文、そしてこの本と、自分の関心はずっと続いています。本を書き上げた今は育児、家事で忙しいのですが、これから何しようかな、という状態です。いろんなプロジェクトに関わらせてもらいながら、次の仕事を考えていきたいと思っています。燃え尽きてはいません。

これまでの研究は、学部の卒業論文から始まっているものですので、初めから本にしようと思って時間を区切ってきたわけではありません。まず大きな問いがあって、それを本にしよう、という訳ではなくて、関心の赴くまま進めてきました。歴史の研究なので、当時の資料を見ながら考えて、徐々に徐々に問題意識を育んできました。2010年代から単発の論文にしつつ、2013年に博士論文を提出しました。研究の経緯、きっかけを話し始めると、僕の20代を全部話すことになってしまいます。

一番大きかったのは桜井由躬雄（ゆみお）先生との出会いです。僕は東京大学の東洋史専攻に進学し、そこで東南アジア史の桜井先生に出会いました。桜井先生はベトナムの専門家でした。桜井先生はビルマの専門家という訳ではなかったのですが、桜井先生からは、現地社会にどういう心持ちで向き合うか、そして歴史を書くというのはどういうことなのかを教わりました。学問、そして地域研究のイロハを教わりました。

桜井先生の影響はすごく大きかった。歴史は面白いなと思い、大学院に行こう、研究を進めたい、と思いました。ただ、桜井先生は博士論文提出1ヶ月前に急逝され、博士論文も本も見ただけでできなかつた。でも桜井先生のおかげで今があります。

## 小さな選択の繰り返し

どうしてミャンマーを選んだか、これは本の「あとがき」にも書いたことですが、小さな選択を繰り返してきた結果です。いつのまにか、どっぷりミャンマーにはまっていました。それが正直なところですが、学部時代の卒業論文はオリジナルの一次資料にあたる必要があったのですが、東南アジアの現地語はできません。植民地期をやるにしても、ベトナム、ラオス、カンボジアはフランス語が必要、インドネシアはオランダ語が必要です。僕は、現地語もできない、そういったヨーロッパ言語もできないという状況でした。

自分ができる言葉でオリジナルのデータにアクセスできる国というと、旧イギリス植民地のみでした。マレーシア、シンガポール、ミャンマーだけです。その中でもミャンマーは研究蓄積が少ない。長く研究がされてこなかったし、しづらい状況でした。また、恩師の桜井先生もミャンマーのことはあまり詳しくは知らないだろうから、あまりうるさいことを言われなさそうだ。そういった色々な思惑がありました。

## もう2度とミャンマーに来たくない

それで、学部4年の終わりに初めてミャンマーに行ってみました。タイ旅行の後に1週間ほど行きました。タイのバンコクは、通りにコンビニが4軒も5軒もあって、コンビニで食べ物が買えるので、ここは生きていくに困らない場所だと思いました。でもミャンマー旅行のあとでは、もうミャンマーには2度と来たくないと思いました。

当時は強制両替制度があり、まずミャンマーでしか通用しない兌換券にドルを代える必要が

あったのです。200ドル分です。でも、その兌換券はそのまま道端では使えません。そこから現地通貨に交換しないといけません。当時はオフィシャルな両替商と、ヤミ両替商がありました。オフィシャルとヤミ両替商でレートが100倍ぐらい違うので、ヤミ両替商を使うのが当たり前で黙認されていますが、「良い」ヤミ両替商を見つけて替えないといけません。

でも、僕は片言の日本語が話せる怪しい人について行ってしまった。喫茶店で替えたのですが、だまされてしまった。レートをちょろまかされて持ち金の半分持っていかれた。もうこんなところ来たくない、もう2度とミャンマーには来たくない、と思いました。極貧生活1週間です。その後も、「こんなこと有り得ない」ということがその1週間でたくさん起きました。

でも、面白そうだな、とも思い、もう一度行きたいなとも思いました。それで、一年留年して卒論を提出し、修士に進んでからは、東京外大でビルマ語を学習しました。そうして知り合いが増えていくうちに、ミャンマー研究者になるのだろうとみんなに思われるし、自分でもそうなるのかもしれないと思うようになりました。まあ、まずは2年修士に行って、それから考えよう、というような感じで、結局、留学し、博士論文まで書きましたが、初めから計画的に考えていたわけではありませんでした。

## 研究者の道に進む

もともと、学校で勉強する歴史、歴史もののゲームなど、歴史に興味はあったのですけれど、海外に興味が出てきたのは大学に入ってからです。東大は2年生に上がるまで専門を決め

なくても良いので、3年生に上がるときに東洋史を選びました。人類学には興味がありましたが、1、2年生の時に成績が良くないといけません。東洋史は西洋史、日本史以外全部。日本とヨーロッパ以外全部です。つまり東洋史にはアフリカも入ります。先生がいるかないかにもよるけれど、一番グローバルな勉強ができるのは東洋史、という宣伝文句もできますね。そこで桜井先生の授業を面白いと感じたことで、なし崩し的に研究者になる道へと足を踏み入れます。就職活動はしなかったです。

4年生のときに、桜井先生に卒業論文を認めてもらえず、1年留年しました。論文を書くためにイギリスにも行って資料調査し、けっこう頑張った学生だったのですが、修士に行くのだったらこれではだめだ、と言われ、留年することになりました。厳しい道なのだという自覚をすると同時に、この頃から研究者の道に進みたいという気持ちが出てきました。それで、一度現地を見ておかねばならないと思って、初めてミャンマーを訪れてみることにしたのです。

## 本書の内容とパッケージング

本書、『胎動する国境—英領ビルマの移民問題と都市統治』の内容ですが、実は内容はばらばらです。内容は公衆衛生、都市計画、治安維持の3つです。まともに向き合えば1つずつが博士論文になるようなものですが、僕は中途半端に1章ずつかじってしまった。そもそもこれら3つは別の論文で、公衆衛生が卒論、都市計画が修士論文です。博士課程に入ってから治安維持に手を出します。

博士論文はこれまでのものを全部まとめる必要がありましたが、これら3つはかなり違うも

のだけに、全部を包める風呂敷が見当たりませんでした。そのパッケージを考えている中で、自分の個々の論文テーマを掘り下げていくと、最大公約数として「国家の形成」、「国境の形成」というものが出てきました。それで、「国家の形成」、「国境の形成」でこの3つの論文をくるむことにしました。

大きなテーマに自覚的になったのは、パッケージを考えていたその頃のことですが、それぞれ個別の論文に関しては、そうした大きなテーマについて自覚的であったわけではありません。例えば卒業論文では、公衆衛生の中の種痘に注目しました。天然痘に対するワクチンです。これは19世紀から20世紀にかけての新しい技術で、それがどういう風にミャンマーの中に広がっていくか、植民地政府がどうやって国造りの中で広めていくかといった、技術的な事実を淡々と書いていく論文を書きました。

卒論では、都市における移民の衛生管理にも言及したのですが、それから都市での民族対立にも興味が湧き、修士論文では都市政策が都市での民族対立とどう関わったかについて書きました。博士課程では、国家の形成と都市での社会変容をどうつなげられるのかを考え、治安維持の問題をそういう関心から掘り下げました。

それで、「国家の形成」、「国境の形成」から今までの関心を見直せるのではないかと思います。博士論文でまとめた次第です。結果的には国境というパッケージングが良かったと思うのですけれど、そこに行きつくまでが難しかったです。大学に入学してから僕の周囲にあった知的な環境とビルマ史の関心との足し算で、こういう研究課題にたどりついたのだと思います。しかし、自覚し始めたのは博士論文をまとめる頃です。それまでは、そういった「パッケー

ジ」を意識して研究していたわけではありません。

### ビルマ史研究の新しい切り口

ビルマ史の切り口として、本書のように、どうして国境、国家をめぐる課題に取り組んだのかについては、それはもう、研究対象の外というか、自分が持ち込んだ関心です。僕が大学に入った時はナショナルヒストリーを脱構築しようという本ばかりがあふれている知的状況でした。国民国家の見直しが全体的なトレンドなので、生の資料を見ていく際にも、国民国家を見直そう、という視点が無意識に自分に刷り込まれていました。

おそらく今、世界のあらゆるところで国民国家という制度の問題点が出てきていると思います。でも、個々の国民国家がどういう形で現れて、どういう風に働いているのかはケースバイケースなのですよね。ミャンマーにおいて、国民国家の働き方は今、非常に重要です。特にロヒンギャの問題もそうですが、誰を国民とみなし、誰を国民とみなさないのか。それで、国民とみなした上で、その全員に平等に権利がいきわたるわけではないということも。

そうした国民国家の働きは今のミャンマーの文脈で非常に重要です。ミャンマー研究の文脈でも、国境、国家をめぐる課題、問いが重要だと思ったので、自分の20代の当時からの知的環境によって育まれた問題関心とミャンマーの現実の問題がうまくつながったと思います。

### 本書の意義

ビルマ史を知らない人にも本書の意義を伝えるとしたら、そうですね、それはこう、読者の裾野を広げれば広げるほど僕が初めて言うことではなくなってくるかもしれませんね。本書から言えることは、今ある国家とか、国民の姿というのは、必ずしも当たり前な自然なものではない、ということです。先ほどの国民国家の相対化ということとも関わりがあるのですけれど、それは歴史的に「作られた」ものであるということ。特にここ150年、200年ぐらいの歴史の中で、その過程で何が起きたのかを見るのが重要です。

でも、そんなことはかれこれ、この20、30年ぐらい言われ続けてきたことです。例えば、国民国家を想像の共同体だとするアンダーソンがいるし（『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山、2007年）、アジ研のトンチャイさんもいる。日本といえば大きい島が4つあって、とか、地図上でのああいって「国土」の形を国民一人一人が頭に置くことによって国民国家が実体化していく、トンチャイさんはそういう議論を行いました（『地図がつくったタイ—国民国家誕生の歴史』明石書店、2003年）。

僕の場合はそういう「思念」よりも、どちらかというオン・ザ・スポットの「身体的な経験」に注目しました。行政そして国家がある権力をもって様々な場面で行動をとるわけですが、その現場で普通の人たちは、そのように行使される権力を身をもって経験していきます。行政、国家が普通の人たちの中に権力を刻み込んでいく過程です。この着眼は重要ではないかと思いました。

ラングーン（今のヤンゴン）という町、それは点に過ぎない場所ですけれども、ビルマでは人の流動性が一番激しく、一番重要な町です。ここで行政官と社会との政治的相互作用が起こった。このことによって、この都市が背負っている国家を普通の人々にイメージさせた。そこでは誰がその国家に属する人で、誰がそうではないか、この区切りを経験的に刷り込ませていく過程があった。本書ではこう考えています。

### 現代への含意

ビルマ史の研究から他の地域への含意を引き出せるのかは、それは、読む人の取り方次第ですけれども、引き出すことは可能だと思います。本書は歴史を扱っていますが、現代への含意もあると思います。例えば、本書で示唆されたミャンマーの排他的なナショナリズムのあり方は、現在のロヒンギャ問題とも関わっているといえるでしょう。

今のミャンマーにおける国民の定義を考えると、土着の民族かそうじゃないかを非常に気にしていて、それはロヒンギャ問題に深く関わっています。それでは、ミャンマーにおいて土着とは何か。それは、「ある領域」に昔から住んでいる人たち、という意味ですけれども、その領域自体、19世紀の末になって初めて地図上に姿を現すような空間です。イギリスの植民地以前からその空間に住んでいる人を土着という定義で使っています。

でも、この定義では、実はかなりおかしなことになる。そもそも国境などないところで人は自由に往来していたわけです。ロヒンギャはまさにそういう人たちだった。過去のある時点にはなかったものを今想定して、その時に内側に

いた人と外側にいた人を峻別するなんてことは、本来不可能なはずですが、でも今、それをやって誰が国民か、誰が国民でないかを区別しようとしています。

それではなぜ、そういう発想が生まれてきたのか。これを考えることが重要で、ここに対して本書の植民地期ヤンゴンの事例は1つの含意を与えてくれると思います。ヤンゴンにおいてビルマ人でない人、というのは主にインド人とか、華人、ヨーロッパ人が想定されていて、「誰がビルマ人か」という問いが生まれる前にもう、「誰はビルマ人ではない」という答えが既にあるのです。

ビルマ人というのは仏教徒であり、ビルマ語を話し、ビルマの歴史を持ち、というナショナリズムが形成されていますが、実はそうじゃない土着の人がたくさんいました。彼らはビルマ語ではない言葉を話し、別の宗教を奉じています。誰を土着民族として仲間に囲い込むか、それとも外国人として排除するかについては、恣意的で、政治的な過程があった。そうした大きな動きがヤンゴンでまずあった。その過程を本書で描きました。

その過程では、ナショナリズムの常道である思念だけでなく、もっと実際的な統治の観点から植民地行政が作り出したものがあつた。教育によっていきわたる思念・理念としてのネイションだけでなく、実際的で実務的な存在である国家が「国民国家」を作り出す。認識のレベルの思念と、行政実務に対する日々の身体的な経験のレベルの両方が、車の両輪として国民国家を作り出す。

つまり、国民国家なるものを頭に置くというだけでなく、もっとう、頭の中の思念・理念とは別に、病気を防がないといけない、犯罪者

には対応しないといけないといった、そういうかなり実際的な日々の行政運営が人々の身体的経験として国民国家を作り出す。そうやって、人種的な色彩を帯びた国家というものが人々の経験のうちに刻み込まれていった。こういう議論を本書で行いました。

### 文書に刻み込まれる当時の経験と認識

当時のヤンゴンでの経験を今のミャンマー人が覚えているとか、そういう経験を自ら持っているというわけではありません。ただし、独立直後の国家の形を作る様々な文書（もんじょ）に当時の経験と認識が刻み込まれています。例えば、初めてできた憲法や市民権法では、「ミャンマーの国民は土着民族である」ということが前提となっています。それでは、そういう文言がなぜできたか。

僕は、独立後の国家の形を決める様々な文書、制度というのは、植民地主義のもとでの国家形成と、ビルマ・ナショナリズムが育んできた様々な思念との相互作用のなかで生まれてきたものだと考えています。

### さらなるナショナリズム研究の必要性

このように、アンダーソン、トンチャイさんとは、分析視角が違うと思っています。彼らにとっては教育によって普及していく「思念」が重要だけれど、僕はそこをスキップしていません。彼らのようなオーソドックスなナショナリズム研究はミャンマーではあまり蓄積がないので、僕はそこをすっ飛ばして本書でイレギュラーなことをやってしまった。ただし、もう一度アンダーソン、トンチャイさんに立ち戻って、

オーソドックスなナショナリズム研究を真面目にやらないといけないと思っています。

本書の弱点になるのですが、本書は主にイギリス語による国家側の史料、植民地行政の文書を使い、国家の行政官が何をしたか、思ったかについての視点から書いたものです。でも、じゃあミャンマー人自身が当時どう感じたかと問われると、そこは非常に弱い。当時のビルマ語新聞を史料として使ってはいるけれど、そこを厚くしていく必要があると思います。

そういう意味で、まだやり残したことはかなり多いです。他の東南アジア地域では90年代からナショナリズム研究がすごく盛んです。植民地に反抗して運動していた人が独立後に国家をつくりあげてきた歴史がある。そういったリーダーの思想的な連続性、つまり現地のリーダーがどういう思想をもって、どういう国家づくりをしたかについては、現地語を使って詳細に跡付けられてきました。

ただ、ミャンマーはそういうものが非常に弱い。研究の難しい環境がありました。まず、軍事政権下で、研究者が国に入りづらかった。また、戦争もあって、現地の新聞、古い現地語資料が散逸してしまって、まとまった形で得づらい。こういった事情から研究のサークルも小さいままで、全世界的に研究蓄積が非常に限られていました。タイ、インドネシアと比べると研究の蓄積が非常に少ないといえます。

### これから取り組みたい研究

本書では日々の行政実践という車の片方の車輪しかみていないのですが、もう一つの車輪である思念を見据え、独立後のビルマ国家とビルマ・ナショナリズムがどういうものとして

現われてきたか、そして、そうして現われてきたものが都市空間にどのような影響をもたらしたのかも今後研究したいと考えています。

より詳しく言うと、今回執筆した本は19世紀後半から1930年代を対象とした研究ですが、今後の新しい課題として、ほぼ同じ時点でのミャンマー側の思想史を考えたいです。ミャンマー側の視点を取り入れて、ミャンマーのナショナリズム研究に真面目に取り組みたいです。これはこれで、本がもう一冊できる位の仕事になります。

これからやりたいことはいくつもあって、もう一つ、都市という意味では、植民地都市がこの後の時代にいかに国民国家の首都に変貌していくかという課題にも興味があります。

どうしてかという、戦争と独立を挟んでヤンゴンという町はすごくドラスチックに変わりました。1930、40年代までは人口の半分がインド人で、総人口も50万程度でした。しかし独立後10年あまりの内に、瞬く間に100万人規模の都市になっていく。そうして人口の8割をビルマ人が占めるようになる。そうすると、こう、オープンでコスモポリタンだった植民地都市が、独立後に非常に閉鎖的な貧しい国民国家の中心に位置づけられ、変わっていく。

こうして外との関係がだんだんと狭められていき、開放的だった植民地都市が国民国家によって囲い込まれていくような過程がありました。同時に、後背地からどんどん人が流入し、町が肥大化する。都市がビルマ人のためのビルマの中心地になっていく。そうした過程を描くような研究をしたいと考えています。

1950年代以降、アジアの都市が肥大化していくのはかなり普遍的な現象です。ただ、ビルマの場合は、広大な後背地で内戦が長くつづき、避難民が都市に流入していくのがひとつの特徴です。そういう20世紀後半の東南アジア

都市の比較史も念頭に置きながら、ミャンマーの国民国家の首都形成はどのような特殊性があったのかというのも一つの切り口になります。

## 英語、ビルマ語での出版計画

英語、ビルマ語には翻訳したいと思っています。本書のもとになっている論文はそれぞれ英語で発表していますが、単にそれらの論文をつなげればよいというだけのものでもありません。英語にすることは考えていますが、本書は主に日本の文献の問題意識の上に載せて書いていますので、今度は英語の学界の問題意識に位置づけ直す必要があります。アンダーソン、トンチャイさんも再び、英語の学会の問題意識に引き寄せて再び引用することになります。これは作業が大変で先延ばしになっています。

また、このまま早く出すか、それとも新しい論文も入れて不備を補って出すのかも選択です。そうやって現地語資料を追加し、不備を補ってからとなると、それはもう一冊、別の本を書くようなことになってしまいます。早く出した方が良いのかな。具体的にはこれからです。

ビルマ語訳は、現地で勝手に英語の本から翻訳して出版してしまう人がいます。著者と連絡を取りつつではなく、勝手に出してしまう。印税が全く発生しないのは気になりませんが、きちんと理解しないのに訳されてしまうことがありますので、英語での出版と同時にビルマ語訳も自分で用意するという事も考えています。

## 研究者を目指したい人に:「急がば回れ」

今は家事・育児に時間を使っています。2016年11月に子供が生まれました。本は11月10日発行で、11月11日に娘が生まれたので、自分の子供が「二人」連続して生まれたようなものです。2ヶ月の育児休暇も取ったのですが、それでは短く、娘が生まれた直後に出張したのも良くなかったです。

研究者を目指したい人に偉そうなことを言える立場ではないのですけれど、狭い問題にとられすぎない方が良いでしょう、楽しいだろうなとは思いますが、若い研究者が大学院生時代から業績中心主義でがんじがらめになっている状況があると思うからです。博士論文を提出するのにも公刊論文があることが条件とされたりして、専門以外の分野で見聞を広める余裕がなかなかないように思います。

僕自身はちゃらんぽらんでしたし、業績を出すことにフォーカスしてきたわけではなく、運良く就職できたからこういうことを言っているだけかもしれません。でも、余裕を与えないような、そういう圧力には徹底的に抗戦して、よく遊ぶ、アンテナを張りながら遊ぶのが良いのではないのでしょうか。また、やんなきゃ、忙しい忙しいと言っている人はかわいそうだし、忙しいと言っている人が良い研究を出せているわけでもないなという実感もあります。

たくさん本を読んだり、いろんなところに行ったり、いろんな人と話したりすることでしか培えないものがきっとあると思います。目に見えやすい業績には直結しませんが、世界観とか歴史観とか、そういう広がり自分で作ることを意識的にすれば、研究にもいつかフィードバックがあるのではないのでしょうか。「急がば回れ」なのかもしれません。■

(インタビューと構成: 佐々木晶子、町北朋洋、2018年1月22日、アジア経済研究所にて)

## インタビューを終えて、もうひとつ

多様な人々が自由に往来し、コスモポリタンな様相を帯びた「開いた」都市においてこそ、領域国家や人種言説といった「閉じた」枠組みが生まれるというのが本書で言いたいことのひとつでした。

世界の現況をみても、グローバル化がいわれる一方で、各地でのヘイトスピーチの横行や米大統領の「壁」発言、イギリスのスコットランド分離問題やEU離脱、カタルーニャ分離など、100年前のラングーンで観察されたのと似たような状況が見られます。あるいは、第三世界では100年前から問題であったことが、今になって欧米でも明示的に問題になってきたということかもしれません。時代的背景がまったく違うので、同じだと考えるのは短絡ですが、過去の経験から現在と将来について考えるための示唆は得られると考えています。

最近、アジアを対象とする一部の歴史学研究では、国民国家の失敗を批判しようとするあまり、20世紀前半のコスモポリタニズム(多様な要素の「共存」)を過度に高く評価する傾向があるように感じます。私はそうした思潮に対して批判的で、20世紀前半のコスモポリタニズムの前提に植民地主義や帝国主義といった差別的な思想や現実があったことを見逃してはいけないと思っています。少なくとも100年前のミャンマー、ヤンゴンでは、開放系のコスモポリタニズムのうちに、すでに次の時代の防衛的で閉鎖的なナショナリズムが生まれる契機がはらまれていました。(長田紀之、2018年1月23日)